

教育関連記事

エデュサン  
edu sun

1

2025 / No.113



「書き初め大会」「百人一首大会」を開催（NY 日本人学校）

発行／DAILYSUN NEW YORK LLC 1270 Avenue of the Americas, 7th Floor, New York, NY 10020

TEL : 646-327-6443 WEB : [www.dailysunny.com](http://www.dailysunny.com) E-MAIL : [info@dailysunny.com](mailto:info@dailysunny.com)

## 1. 教育レポート

- ◆ [「思いを言葉にのせて」作文発表会を開催 育英サタデースクール・マンハッタン校](#)
- ◆ [イエール大学アートギャラリーを訪問 NY 日本人学校](#)
- ◆ [笑顔と歓声あふれる1日、お楽しみ会を開催 NY 育英学園フレンズアカデミーたんぽぽ幼稚園](#)
- ◆ [日本のお正月をNYで味わったよ 育英サタデースクール・マンハッタン校](#)
- ◆ [「書き初め大会」「百人一首大会」を開催 NY 日本人学校](#)

## 2. NY 教育関連ニュース

- ◆ [「読字障害」生徒へのケアは不十分 NY が最優先事項に掲げて3年が経過](#)
- ◆ [女子生徒の成績低下、男子より深刻 パンデミックによる学習損失で](#)
- ◆ [移民生徒強制送還の脅威に備え 捜査官の対応手順など、DOE が指導](#)
- ◆ [学校での携帯制限法案提出へ NY 州知事、次期予算案で明らかに](#)
- ◆ [NY 州、教育支出増加も学力アップ見られず 私立校生徒への補助など教育改革を](#)
- ◆ [「蕎麦打ち」が必須科目！？ 日本のユニークな高校がNYに飛び出し「蕎麦職人」体験](#)



エデュサン  
edu sun

# 1. 教育レポート

EDUCATION REPORT

# 「思いを言葉にのせて」 作文発表会を開催

育英サタデースクール・マンハッタン校

1/9/2025

育英サタデースクール・マンハッタン校（牧野佳代子ディレクター）は昨年 12 月 14 日、小学部全員（1 ～ 6 年生）が一堂に会し、保護者も招いて作文発表会を開催した。

小学部では毎年、年末のこの時期に各学年の代表による作文発表会を行っている。2024 年の代表は 13 人。テーマは学年ごとに異なり、2024 年は「あったらいいなこんなもの」「10 年後の自分へ」「私の尊敬する人」などのテーマに取り組んだ。

発表会では、「困っている人たちを助けたい、こんなものがあったら、10 年後理想とする大人になるために、こんなことを頑張りたい、自分へのメッセージ、大切な友人や家族」など、それぞれの熱い思いを堂々と披露。また、発表を興味深く聴く子どもたちの姿も印象的だった。この日参加した保護者たちは、子どもたちの作文力や発表力の高さ、また、学びの一環として、毎日作文に取り組んでいる様子にふれ、皆、感慨深げだった。

新年からの第 3 学期には 1 年間の集大成となる文集作りが始まる。（情報・写真提供：育英サタデースクール・マンハッタン校）



6 年生の発表に聴き入る子どもたち



直立不動で発表。ちょっと緊張気味かな？

# イエール大学アートギャラリーを訪問

NY 日本人学校

1/10/2025

ニューヨーク日本人学校（コネティカット州グリニッチ、岡田雅彦校長）の4年生は昨年12月18日、イエール大学のアートギャラリーを訪れた。アート科移動教室の一環。

前半はミュージアムエデュケーターの案内の下、絵画や彫刻を鑑賞した。子どもたちは、ミュージアムエデュケーターとの対話を通して作品の歴史や背景を学んだ他、模写に挑戦したり意見交換したりした。特に注目を集めたのは、19世紀中頃～20世紀初頭のアメリカ人画家、エドウィン・オースティン・アビー作の「Study for The Hours（めぐり合う時間たちのための習作）」。この作品は、1日24時間を象徴的に表現したもので、美術史において「人間の生活に焦点を当てた初の作品」とされている。子どもたちはミュージアムエデュケーターの解説に耳を傾けつつ、各自気に入った部分をスケッチブックに模写した。その後、描いた模写を見せ合い、「1日の時間がいろいろな形で表されているのが面白かった」などといった感想や気づきを共有した。

今回のギャラリー訪問を通じて子どもたちは、美術の世界に触れ、より一層異文化や時代背景への理解を深めたようだ。（情報・写真提供：ニューヨーク日本人学校）

「めぐり合う時間たちのための習作」を模写する子どもたち



各自の個性が反映された模写。ちびっこ画家たちは、ポーズも決まっています！

# 笑顔と歓声あふれる 1 日、お楽しみ会を開催

NY 育英学園フレンズアカデミーたんぽぽ幼稚園

1/16/2025

ニューヨーク育英学園フレンズアカデミーたんぽぽ幼稚園（マンハッタン、笠間将平ディレクター）は昨年 12 月 20 日、「お楽しみ会」を開催した。モグラたたきや輪投げ、紐引きゲームなど多彩なアクティビティーを通じて、子どもたちの笑顔があふれる特別な 1 日となった。

輪投げコーナーでは、的確に輪を投げ入れる子どもたちからは歓声が、惜しくも外してしまった子どもたちからは「あぁ～！」と落胆する声上がり、教室は終始、にぎやかだった。人気を集めたのは、プレゼントがもらえる紐引きゲーム。多数ある紐の中から「運命の 1 本」を選ぶ子どもたちの表情が印象的だった。「どのプレゼントが当たるかな？」とワクワクしながら紐を引く姿からは、期待と興奮が伝わってきた。この日は全員に同じプレゼントが用意されていたので、がっかりする子どももなく、会はにこやかに進行した。

現れては隠れる動物を追いかける定番のモグラたたきでは、ゲームに夢中になる子、動物を優しく扱う子、動物の出し入れを手伝う子など、それぞれの子どもたちの個性が垣間見えるひとときとなった。

最後は読み聞かせと、ホリデーシーズンならではのスペシャルなおやつを食べて会を終了した。（情報・写真提供：ニューヨーク育英学園フレンズアカデミーたんぽぽ幼稚園）



どんなプレゼントが当たるかな？

# 日本のお正月を NY で味わったよ

育英サタデースクール・マンハッタン校

1/17/2025

「明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします」

子どもたちの元気いっばいな声が校舎中に響きわたり、育英サタデースクール・マンハッタン校（牧野佳代子ディレクター）で4日、第3学期が始まった。

午後の中学部では、全学年が一堂に会し「百人一首大会」を開催。同大会は、生徒が楽しみながら古典文学に親しみ、日本の伝統文化を学ぶことを目的に毎年開催している。「源平合戦」の形式で進行し、3年生が司会やルールを説明。生徒は1～3年生までの混合グループに分かれ、源氏と平氏の2組で競い合った。読み手の声に耳をすませながら、1枚でも多く取ろうと真剣な表情で札を見つめる姿が印象的だった。手を素早く伸ばして札を取り合う場面では、教室全体が緊張感に包まれ、札が取られるたびに歓声が上がり、チームで喜び合う姿も見られた。大会を通じて生徒は学年を超えた交流を深め、国語の授業で学んだ古典の知識を生かしたようだ。

幼児部では「お正月の集い」を開催。日本の正月は、幸福をもたらす年神様（としがみさま）を家族全員で迎え、新しい年の始まりを祝うもので、しめ縄、門松、鏡餅などを飾ったり、おせち料理を食べたりして過ごす。子どもたちは正月についての説明を聞いた後、「お雑煮を食べた」「鏡餅を飾った」など、それぞれの家庭での出来事を報告し合い、正月についての紙芝居で学びを深めた。こまや羽付きなどの正月の遊びを体験し、頭を噛んでもらうと邪気払いや疫病退散のご利益があるという獅子舞に「ガブリ」とされ、今年1年の健康と成長を祈った。

（情報・写真提供：育英サタデースクール・マンハッタン校）

札とにらめっこして、取る気まんまん



ミニチュア獅子が頭をガブリ、  
今年も元気にいきましょう！

# 「書き初め大会」「百人一首大会」を開催

NY 日本人学校

1/31/2025

ニューヨーク日本人学校（コネティカット州グリニッチ、岡田雅彦校長）は2日、3日の両日、全校あげての新年の恒例行事「書き初め大会」を開催、子どもたちは、昨年12月から国語の書写の時間で練習に取り組んできた成果を思う存分発揮した。

1、2年生は教室で硬筆を、初等部3～6年生は楷書、中等部7～9年生は毛筆で行書の作品づくりを体育館で行った。静寂の中、「一意専心」の精神で一字一画、真剣かつ丁寧に取り組む姿が印象的だった。完成した作品は教室前の廊下に掲示され、厳正な審査を経て、受賞作品が決定した。休み時間に子どもたちは廊下で作品を鑑賞し、惜しくも賞に漏れた友達の作品をほめるなど、微笑ましい光景も見られた。

新年の恒例行事はその後も続き7日には、「百人一首大会」も開催した。この日は6～9年生が体育館に集まり、熱い戦いを繰り広げた。国語の授業での練習の他、休み時間や冬休み中に主体的に特訓する子どもも多く、「決まり字を覚えて、速く札を取れるようにしよう」「この歌は好きだから絶対に取る」など、各自が目標をもって取り組み、大会に臨んだ。

7日の本番では「横綱」「大関」「関脇」「小結」の学年混合9グループに分かれ練習の成果を競い合った。「ちはやふる神代もきかず竜田川…」の一文字目が読まれるや否や、その札に一斉に飛びかかる場面もあり、大いに盛り上がった。また、英語科のアメリカ人教師も読み手として参加し、日本の伝統文化の良さ、日本語の響きの美しさを、子どもたちと共有した。（情報・写真提供：ニューヨーク日本人学校）



墨汁の匂いが漂う中、真剣に筆を運ぶ



お手本を見ながら丁寧に。硬筆で書き初めをする子どもたち



どれだけ早く取れるかな？



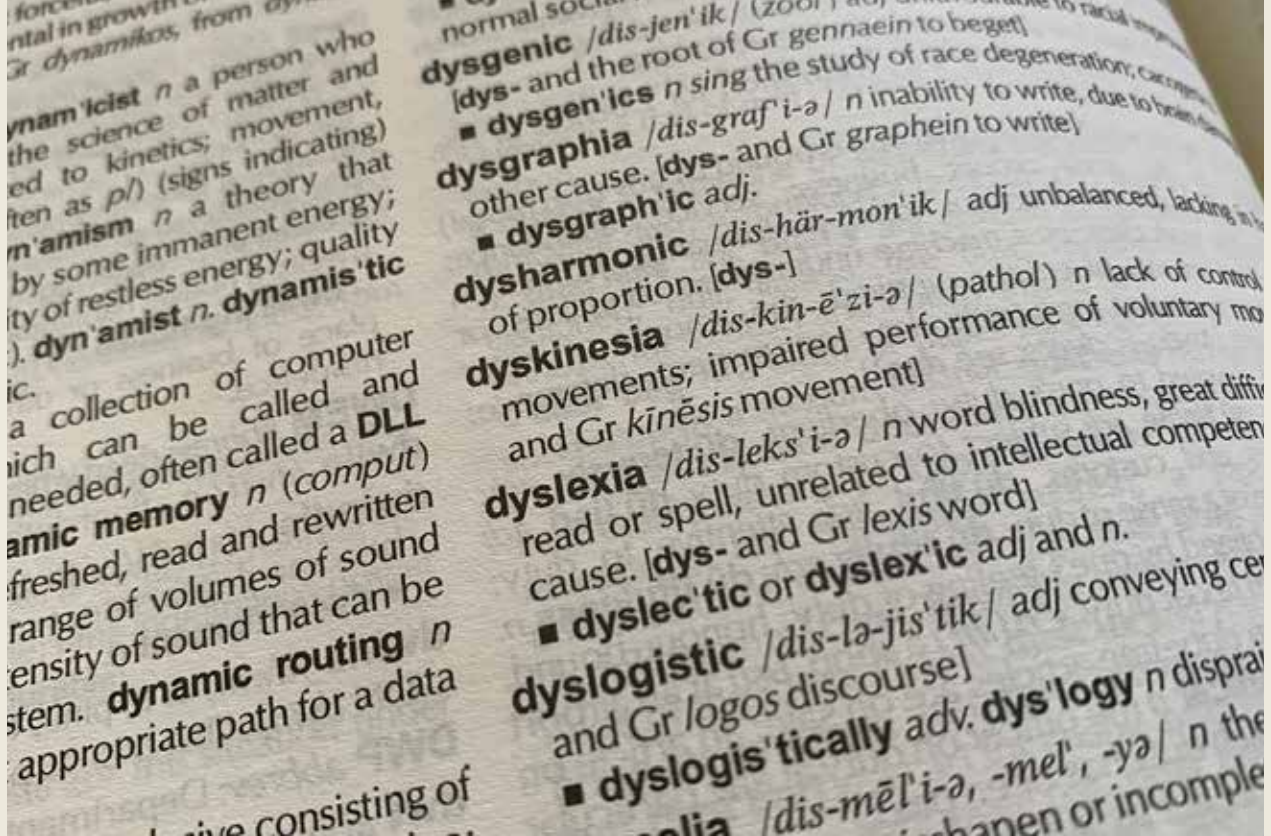
和太鼓も応援演奏。体育館は熱気に包まれた



エデュサン  
edusun

## 2. NY 教育関連ニュース

NEW YORK EDUCATION NEWS



## 「読字障害」生徒へのケアは不十分 NY が最優先事項に掲げて 3 年が経過

1/8/2025

一般的な理解能力などには異常がないものの、文字の読み書きには著しい困難を抱え、学習障害の一つに位置付けられるディスレクシア（読字障害）。ニューヨークのアダムズ市長が、教育上の最優先支援課題としてから３年が経過した。ただ、市内の多くの公立学校は、ディスレクシアを抱える児童・生徒への対応が十分にできていないという。

ゴッサミストがこのほど、ディスレクシアを持つ児童・生徒 10 人の保護者に見解を求めたところ、「読むことに苦労している子どもがいる中で、『持てる者』と『持たざる者』の間で分断が広がる機能不全のシステムは、存続したままだ」との声が寄せられた。持てる者である富裕層は、より良い読書指導を受けられる私立学校に子どもを入れ、7 万 5000 ドル以上もの学費を負担するのが一般的だ。これに対し、持たざる者とされる裕福でない家庭では、子どもたちが読解力で遅れをとっても、公立学校にとどまる以外の選択肢は持ちえないことが多いという。

専門家は、読字障害を持つ児童・生徒は5～20%に上ると見積もる。必要な支援を受けられない読字障害の子どもたちは、うつ病や不安に悩まされるだけでなく、学校を中退し、失業する可能性が高いという。合わせて、複数の研究によれば、刑務所に収容されている受刑者らには読字障害を抱えている人の割合が高いと指摘されている。



写真はイメージ picjumbo\_com / pixabay

# 女子生徒の成績低下、男子より深刻 パンデミックによる学習損失で

1/10/2025

ウォール・ストリート・ジャーナルが全米の生徒のテスト成績を分析したところ、読解力や数学、科学の分野において、女子生徒が深刻なペースで男子に遅れをとっていることが明らかになった。同紙が5日、伝えた。

2019年以降、女子生徒のテストの成績は急激に低下し、過去数十年間で最低の水準にまで落ち込んでいる。男子生徒の成績も同様に低下しているが、女子生徒の方がより深刻だ。20年以前は同等またはわずかに男子が上回っていた数学は、今では男子が常に女子を上回る。読解力においては、依然として女子が男子より高い成績を収める傾向にあるものの、その差は縮まっている。この調査結果は、パンデミックによる学習損失が女子に特に大きな打撃を与えたことを示唆している。最新のテスト結果では、女子の成績がまだ回復していないことが示されていた。

教師や保護者、教育研究者は、学習損失における男女格差の要因を特定できていない。ただ、パンデミック中に行動の問題が増加したため、教師が、授業中に問題行動を起こしやすい男子生徒により注意を向けるようになったことや、パンデミック以降、多くの女子生徒が家族の世話や家事の責任を担うようになり、学習に費やす時間やエネルギーを奪われたことが、その要因だとの見方もある。



写真はイメージ（WOKANDAPIX / pixabay）

# 移民生徒強制送還の脅威に備え 捜査官の対応手順など、DOE が指導

1/14/2025

不法移民の国外追放を公約に掲げるトランプ次期大統領の就任を目前に控え、ニューヨーク市教育局（DOE）は、これに対応する準備を進めている。ニューヨーク・タイムズが 13 日、伝えた。

DOE のエマ・バデーラ副局長は先月、市の学校の校長に宛て、移民税関捜査局（ICE）の捜査官が学校に現れた場合、まず「DOE の弁護士に連絡する」「さらなる指示を待つ」「ICE 捜査官に学校の外で待機するよう求める」との対応手順を電子メールで伝達した。また、学校の職員に「生徒の在留資格を尋ねないこと」「知っている場合、いかなる学校記録にも記載せず、機密事項として扱わなければならない」との指示もあった。

教育局長に助言する 24 人の委員による教育政策委員会は、これらの方針を全て再公表する意図の決議案を準備している。決議案には、「連邦当局から連邦移民法の施行を要請された場合の DOE の対応は、州および市の州が決定する」との方針を盛り込む予定だ。委員会のメンバーは、「最も重要な点は、個々のケースに対する司法令状が必要であり、移民全員を渡せといった一律の取り締まりはさせない」と強調した。生徒の強制送還を懸念する学校管理者向けに、オンライン説明会が企画され、進路指導カウンセラーやソーシャルワーカー、その他の職員を対象とした同様の研修会も計画中だ。



写真はイメージ (Georgia de Lotz / Unsplash)

# 学校での携帯制限法案提出へ NY 州知事、次期予算案で明らかに

1/15/2025

ニューヨーク州のホークル知事は 13 日、州内の幼稚園から 12 年生までを対象とした教育を行う学校での携帯電話の使用を制限する法案を、次期予算案に提出する予定であると発表した。abc7NY が同日、伝えた。

児童・生徒の精神衛生を考慮したとされる同法案の詳細については公表しなかったものの、月末に発表する予算案で明らかにする意向だという。学校における携帯電話の利点と危険性を評価するために、ホークル氏は昨春以後、生徒や保護者、教師らと意見交換を展開してきた。行政命令とは異なり、同法案の成立には、議会の承認が必要だ。

一方、ホークル氏は 14 日の一般教書演説で、ニューヨーク市内 5 区の小学校のスクールゾーンで、横断歩道から 20 フィート以内の駐車を禁止するよう州法を改正する案を発表する見通し。同改正案の狙いは、駐車中の車が走行中のドライバーの視界を遮るのを防ぎ、横断歩道を渡る児童・生徒を見つけやすくすることにある。市には 1800 校以上の公立、チャータースクールがあるが、提案は 5 年生までのクラスがある学校に適用される。州法は既に、横断歩道から 20 フィート以内の駐車を禁止している。ただ、市独自の例外規定では、横断歩道内での駐車だけが禁じられており、横断歩道に近い場所での駐車は認められている。



写真はイメージ (Taylor Flowe / Unsplash)

## NY 州、教育支出増加も学力アップ見られず 私立校生徒への補助など教育改革を

1/28/2025

非営利団体 Citizen's Budget Commission (CBC) は、ニューヨーク州による過去 18 年間の教育への財政支出増加が生徒の学力増進に効果を上げていないとする分析を発表した。シティージャーナルが 27 日、伝えた。

CBC によれば、全米学力調査 (NAEP) でニューヨーク州の 4 年生は読解が 32 位、算数が 46 位。8 年生もそれぞれ 9 位と 22 位だった。州が生徒 1 人당りに使う補助金等は 3 万 6293 ドル。2020 ~ 21 年度に対し 21% も増えている。CBC は「州内の各学区が使う費用は 890 億ドル。そのうち 390 億ドルが州からの財政補助というのは残念な結果」と指摘している。

州内の公立教育の劣化は就学者数にも表れている。幼稚園 (K) ~ 12 年生までの就学者は過去 10 年で 32 万人以上も減少。K ~ 8 年生では 17% も減少している。チャータースクールの生徒が 9 万人増で一部を吸収しているが、州外への転出が進んでいることは明らか。州政府は私立学校を選択する家庭への補助を拒んでおり、その結果、カトリック系学校の就学者は 3 分の 1 も減っている。

人種別では、白人が 23%、黒人が 32% それぞれ減少。その他は増加しており、特にアジア系が黒人の生徒数を上回る勢いだ。州の教育関係者は、市内のエリート公立校でアジア系の生徒が多く人種の不均衡が生じているなど、不毛な議論を展開。さらに、チャータースクールが州からの補助金は少ないものの効果を上げているという事実を無視し、市内のチャータースクール数に上限を設けている。チャータースクールの生徒の 46% が黒人、43% がヒスパニック系であるにもかかわらずだ。

効果は無視した財政支出の増加は意味がない。CBC も「金額を増やすことより、どうしたら効果が上がるかを議論すべきだ」と提言している。全ての家庭に補助金を与え、行きたい学校に行けるようにするなど、大胆な教育改革が必要だ。



北海道幌加内高校の生徒たちが、ニューヨークの蕎麦屋で打った蕎麦



ニューヨークを訪れた北海道幌加内高校の先生と生徒たち  
(左から) 大森拓先生、高校2年生の作田康喜さんと野口翔さん



蕎麦打ちを体験する作田康喜さん



T.I.C. レストラングループ代表の八木秀峰ボンさん（写真右）  
と北海道幌加内高校の先生と生徒たち

# 「蕎麦打ち」が必須科目！？

## 日本のユニークな高校が NY に飛び出し「蕎麦職人」体験

1/31/2025

イーストビレッジにある蕎麦屋で、日本で唯一「蕎麦打ち」が必須科目となっている北海道幌加内（ほろかない）高校の高校生を招いた蕎麦打ち体験が行われた。「日本の若者が頑張る活力になれば」と、同店を経営するT.I.C. レストラングループ代表の八木秀峰ボンさんが直々にオファーしたことから始まった同プロジェクトを取材した。

人口がたったの1200人、そして日本一の蕎麦の生産地として知られる北海道幌加内町にある同高校では、2005年から「蕎麦打ち」が必須科目として組み込まれており、卒業生の中には実際に蕎麦打ち職人としてドイツへと旅立った学生もいるほど。近年はメディア露出も増えるなど、日本中から注目が高まっている。

ニュース番組で幌加内高校が特集されているのを偶然見たという八木さんが、「若い世代を応援したい」と、ニューヨーク招聘を決意。オファーから約1年後のこの日に実現し、高校2年生の作田康喜さんと野口翔さん、そして大森拓先生の3人が蕎麦屋で蕎麦打ち体験を行うこととなった。

同店の蕎麦打ち場所は、入り口入ってすぐのガラス張りのショーケース。来店客がライブで眺められるような造りとなっているため、高校生らもニューヨーカーに見守られながら蕎麦打ちに挑戦した。生徒の1人野口さんは、「ニューヨークという場所に衝撃を受けています。蕎麦打ちは日本でもここでも難しいことに変わりはないですが、この体験を糧にして世界で働いてみたいと、これまで考えていなかった選択肢ができました」と、目を輝かせていた。

実際に彼らが打った蕎麦を“ざる蕎麦”で実食したが、蕎麦特有の弾力の良さと鼻に抜ける香りなど、なかなかの出来栄え。試食した八木さんも目を細め「おいしいよ!」と、作田さんと野口さんそれぞれに励ましの声をかけていた。

今回のプロジェクトについて八木さんは、「世界に出て、蕎麦打ちをお客さんの前で体験することによって、自分たちがこれまでやってきたことが正しいのか判断できるし、ここで得た知見を広めて、他の学生たちにも『ニューヨークで蕎麦は通用する』ことを知ってほしい」と語り、若者のチャレンジに期待を込めた。

supported by



edu sun